

現実世界はあらゆる可能世界のなかで最善の世界なのか？ 「ライプニッツのパラドックス」をめぐって

久保田 進一

はじめに

ライプニッツの世界観はしばしば楽観論的世界観あるいは最善観と呼ばれる。それは、現実世界はあらゆる可能世界のなかで最善の世界であるとしているからである。ライプニッツの考えでは、神はこの世界を創造する以前に、あらゆる可能世界を創造し、それらの創造されたあらゆる可能世界のなかで最も善なる世界を選択したということである。そして、ライプニッツによると、この選択した世界が現実世界であるということである。そして、ここには以下のような前提がある。神は完全に善なる存在であり、それ故に神は自ら創造した世界のなかで最善の世界を選択しなければならない。神は全能なる存在であるゆえに、神はどんな世界でも創造することができなければならない。それ故に、神が選択した世界は最善な世界であるということになる。

しかし、ここには様々な問題がある。いわゆる「ライプニッツのパラドックス」⁽¹⁾と呼ばれるものである。特に、そのなかでも顕著なものは「悪の問題」に関するものである。神が完全に善なる存在であり、全能なる存在であるなら、この世界には悪は存在しなくなる。しかし、悪が存在するなら、神は善なる存在ではないか、全能な存在ではないことになる。この問題はライプニッツ以前の古代の哲学者であるエピクロスから取り上げられている。また、キリスト教においては、このことは大きな問題であり、アウグスティヌスをはじめトマス・アクィナスも議論している。さらには、カントやベルクソンにも見ることができる。

さて、現代においては「分析的神学」の代表者であるプランティンガが問題としている。そこで、本稿においては、プランティンガの議論を辿りながら、「ライプニッツのパラドックス」について検討していこうと思う。プランティンガの議論を辿ると同時に無神論を主張するマッキーの議論も見ていくことにする。それによって、有神論の立場と無神論の立場を対比させることができ、ライプニッツのパラドックスは本当にパラドックスになっているのか。そして、「悪の問題」と自由意志はどのような

に関わってくるのかを検討していくつもりである。

1. ライプニッツのパラドックス

ライプニッツのパラドックスとは以下のようなものである。ライプニッツのテーゼのうちの一つに「現実世界はあらゆる可能世界のなかの最善の世界である」というものがある。何故、このことが言えるのかと言えば、ライプニッツには次のような推論があるからである。その推論の前提となっているものとして、このテーゼとほぼ同じ考えとして次のものが挙げられる。「全能である神は自分が望むどんな世界でも創造することができる」。そして、「善なる存在者である神はあらゆる可能世界から最善の世界を選択した」。そして、「神が選択した最善の世界が現実世界である」ということになる。したがって、「現実世界はあらゆる可能世界のなかの最善の世界である」^②ということになる。そうなると、ここにはいくつかの問題が生じてくる。つまり、現実世界が最善の世界であるのなら、どうして悪が存在するのかという、いわゆる「悪の問題」が出てくる。最善の世界は、実は善の世界ではなく、悪の世界であるということになってしまい、現実世界は最善の世界であることに矛盾してしまう。また、悪が存在するとするのなら、神は善なる存在者ではなく、むしろ悪意に満ちた存在者になってしまう。そのため、神は善なる存在者であることに矛盾する。

さらに、神が全能であるのに、悪を妨げることができないのなら、神は全能ではなく不能であり、全能であることに矛盾する。全能でありながら、悪を黙認するというのであれば、やはり、神は善なる存在者ではなく、悪意に満ちた存在者であることになる。また、もし神が善なる存在者であり、全能であるのなら、この世界には悪は存在しない。しかし、この世界には悪が存在する。すると、そもそも神そのものが存在しないという無神論の立場にまで行き着くことになる。したがって、ライプニッツの最善観（オプティミズム）の主張には、論理的矛盾があり、パラドックスが生じるというのである。そもそも神についての前提とこの世界の悪についての命題を一つにして整合性が合うものとして見なすのは無理なのであるということになる。

ライプニッツのような有神論を主張し、神を擁護する立場、すなわち弁神論（あるいは神義論）を展開する人たちは次のように述べるのである。つまり、われわれが悪と考えているのは、実は悪ではなく、神の視点からすれば、善なのである。神の理解

は人間には理解するには複雑すぎて高度であるために、われわれには一見、悪で見えるものが、実は悪ではないのであるというものである。われわれが悪だと思っている事態は、神には十分な理由があるのだが、われわれには何らかの事情でその理由を神は明らかにしていないのだというものである。したがって、神は善なる存在者であり、全能なる存在者であり、神があらゆる可能世界のなかで選択した世界が最善の世界であり、現実世界なのであるということになる。ここには、なんら矛盾は生じないというものである。

2. 悪の問題

さて、この「悪の問題」に対する議論は、昔からある議論でもある。古くはエピクロスにその議論を見ることができる。ライプニッツの最善観に対する批判は、ヴォルテールの『カンディードまたは最善説』⁽³⁾に見ることができる。例えば、「これがありとあらゆる世界の中で最善の世界であるなら、ほかの世界はいったいどんなところだろう」⁽⁴⁾という皮肉やあるいは最善説とは「うまくいっていないのに、すべて善だと言ひ張る血迷った熱病さ」⁽⁵⁾ということを見ることができる。神が全知全能で善なる存在者であるのなら、何故、もっと住みやすい世界を創造しなかったのだろうかと疑問に思うのも当然であろう。

多くの無神論者は、悪の問題を通して神の存在まで否定するように思える。あるいは、神の存在まで否定しなくても神の全能性に疑問視する。そもそも神が善なる存在者で全能であり、あらゆる被造物の創造者であるのなら、この世には悪は存在しないと思えるのである。しかし、この世には悪が満ち満ちている。自然災害や戦争や事故や殺人や苦痛などを挙げればきりが無い。しかし、このような悪があっても、ライプニッツの考えでは、あらゆる可能世界のなかで神がこの現実世界を選択した以上、この世界は最善の世界ということになる。まさに、ヴォルテールがライプニッツの最善観に皮肉を言いたくなるのも分かるのである。しかし、ライプニッツ自身は最善観に対して反対する人々に、『形而上学叙説』第3項において、反論している⁽⁶⁾。さて、現代において無神論の代表である J.L. マッキーの議論とそれに対するブランティンガの反論を見ていくことにする。

3. J.L. マッキーの議論に対するプランティンガの反論

3.1. <明白な矛盾をしている集合>なのか？

「悪の問題」について、無神論の立場から有神論の立場を自己矛盾しているとみなすJ.L.マッキーの主張を見てみよう。彼は「悪と全能」という論文のなかで繰り返し述べている。

「しかしながら、私が思うに、さらに有効な批判は、伝統的な悪の問題によって行うことができる。そこで示されるのは、宗教的信念は合理的な支持を得られないということではなく、宗教的信念は明らかに不合理である、ということである。つまり、神学上の本質的な教義のいくつかの部分は整合性を欠くのである」⁽⁷⁾

このように、マッキーは宗教的信念は明らかに不合理で整合性を欠いている、と言うが、このことに対してプランティンガは反論する。

「明白な矛盾とは、ある種の命題-その連言肢の一つが他の連言肢の拒否ないし否定となっている連言命題-である。たとえば、次のような命題である」⁽⁸⁾

ポールはすぐれたテニス・プレイヤーであり、かつ、ポールはすぐれたテニス・プレイヤーであるというのは間違いである。

つまり、これはP&¬P という論理式である。これは明らかに矛盾である。プランティンガによれば、「悪の問題」にまつわる命題は<明白な矛盾をしている集合>ではないということになる。しかし、マッキーはこのような形式での矛盾を主張したい訳ではないのであろう。

3.2. <形式的に矛盾している集合>なのか？

また、マッキーが有神論者は自己矛盾をしているというのは、次のような理由からである。

「最も単純化した形式でいえば、問題はこうである。神は全能である、神は全く善である。けれども、悪は存在する。これら三つの命題には矛盾があるように思われる。それゆえ、そのうちのどれか二つが真であれば、残りの一つは偽である。しかしながら、同時に、これら三つの命題すべてが、ほとんどの神学的立場の本質的な部分である。神学者は一度にこれら三つに固執しなければならないけれども、整合的にこれら三つに固執することはできない、と考えられるのである」⁽⁹⁾

つまり、

- (1) 神は全能である。
- (2) 神は全く善である。
- (3) 悪が存在する。

これら三つの命題が一つの集合を構成していると、ここに矛盾が生じ整合性に欠けているというものなのである。

このことに対して、プランティンガは次のように反論する。この (1)、(2)、(3) を一つにする集合 A は明白に矛盾しているのではないことは、明らかであるとする。その理由としては、次のような例を挙げる。

- (4) すべての人間が死ぬとすれば、ソクラテスは死ぬ。
- (5) すべての人間は死ぬ。
- (6) ソクラテスは死なない。

プランティンガによると、この集合 B は明白に矛盾しているのではない、と言う。その理由は次のことからである。

「ここで大事なことは、通常の論理学の諸規則—論理学のどの入門的な教科書にも見られる命題論理と量化理論の諸法則—のみを使用することによって、その集合から明白な矛盾を演繹することができる、ということである。換言すれば、その集合に付け加えるなら明白に矛盾する新しい集合を作らうようなある命題を、はじめの集合から演繹するために、論理学の法則を使うことができる。肯定式の法則 (p ならば

q、p である、ゆえに q) を使用することにより、(4) と (5) から次の (7) が導ける。

(7) ソクラテスは死ぬ。

(7) を集合 B に追加して得られる結果は{ (4)、(5)、(6)、(7) }という集合である。もちろん、この集合は (6) が (7) の否定なので明白に矛盾している⁽¹⁰⁾ と言う。

つまり、集合 B の{ (4)、(5)、(6) }では、明白に矛盾していると言えないが、集合 B の{ (4)、(5)、(6)、(7) }は明白に矛盾している、と言えるのである。そして、この集合 B のような集合をプランティンガは<形式的に矛盾している集合>⁽¹¹⁾ と言う。

マッキーの示した命題の集合 A に戻ろう。プランティンガによれば、

- (1) 神は全能である。
- (2) 神は全く善である。
- (3) 悪が存在する。

という集合 A は、<形式的に矛盾している集合>とは言えないということになる。もし<形式的に矛盾している集合>と言いたければ、(1)、(2)、(3) のいずれかの命題を否定するような命題が集合 A に追加されなければならないのである。例えば、

- (1') 神は全能ではない。
- (2') 神は全く善ではない。
- (3') 悪は存在しない。

という命題が少なくとも集合 A に追加されなければ、<形式的に矛盾している集合>とは言えないのである。プランティンガの立場からすれば、神を弁護することはまだできるのである。

3.3. <潜在的に矛盾している集合>なのか？

では、マッキー自身、自分の主張する集合 A についてどのように考えていたのかと言えば、そんなに単純に<形式的に矛盾している集合>とは考えていなかったようである。マッキーは次のように述べている。

「しかしながら、矛盾は即座に生じるのではない。矛盾を示すためには、いくつかの追加前提、あるいは、「善」「悪」「全能」という用語にかかわる準論理的な規則を必要とする。これらの追加原則とは、次のようなものである。善い物事はそれができかぎりにおいてつねに悪を排除するという仕方で、善は悪と対置している。全能者がなしうることに限界はない。これらの原則から、善なる全能者は悪を完全に排除する、ということが導かれる。そこで、善なる全能者は存在するという命題と、悪が存在するという命題とは、同時に真ではありえないのだ」⁽¹²⁾

マッキーは集合 A が矛盾であることを示すためには、追加前提あるいは準論理的な規則もしくは追加原則が必要であると述べている。ただ、マッキー自身は明確にこれら追加前提あるいは準論理的な規則を述べていないのであるから、マッキー自身はどのようなものを考えていたのかは明確ではない。そこで、プランティンガは、マッキーの意味していることを想定して、次のように言う。

「形式的に矛盾する集合を得るためには集合 A にさらにいくつかの命題を追加しなければならない。そして、集合 A が潜在的に矛盾しているのを示そうともくろむならば、それらの命題は必然的な真理でなければならない。つまり、マッキーの言い方によれば「準論理的な規則」でなければならない二つの追加原則は、次のものである」⁽¹³⁾として、(19)、(20)の命題を想定する。

(19) 善者は自分ができるかぎりにおいてつねに悪を排除する。

(20) 全能者がなしうることに限界はない。

そして、「もちろん、もしマッキーが集合 A が潜在的に矛盾を含んでいることを示そうとしているなら、彼は、(19) と (20) がたんに真であるのではなく、必然的に真である、と考えなければならない」⁽⁴⁴⁾とする。何故、たんに真であるのではなく、必然的に真である、と考えなければならないのかと言うと、たんに真であるというのでは、可能的に真であったり、因果的に真であったり、自然的に真であったりとか様々な意味で真であるということが言えてしまう。その集合が＜潜在的に矛盾している集合＞ということは、「すなわち、諸命題からなる集合 S は、p を S に追加した結果が形式的に矛盾をふくむ集合になるような必然的命題 p が存在するならば、潜在的に矛盾しているのである。換言すれば、通常の論理学の法則のみを使用することによって、S の要素とともに p から明白な矛盾を演繹できるような、必然的に真である p が存在するとすれば、S は潜在的に矛盾をふくんでいるのである」⁽⁴⁵⁾と考えているからである。

プランティンガによれば、(20) は必然的に真であるとするのは、最初からもっともらしいことであると認める。ただし、神は全能だと言うとき、「神の力にはいかなる限界もない」ということではなく、せいぜい、「神が為しうることには論理による以外の限界がない」ということという限定付きである。というのも、「いかなる限界もない」ことを認めてしまうと、四角い円や結婚している独身の男を創造できることになったり、神は自分が存在しかつ存在しないといった状態をもたらすことができることになってしまうからである。少なくとも、論理の枠のなかで収まるようにして、矛盾が生じないようにしようと、大部分の有神論者は考えるだろうとしているからである。もちろん、デカルトのように永遠真理創造説を主張するようなく神の力は論理の法則によってさえも制限をうけない>と考えている有神論者は、別だとしている。いずれにしても、(20) の命題は必然的に真であると認めてもいいとする。

問題は (19) である。(19) は結論から言えば、必然的に真ではない。なぜなら、自分ができることでもその悪について知らなかったなら、悪を排除することはできないからである。そのため、(19) は次のように修正される。

(19a) あらゆる善者は、自分が知っておりかつ排除できる、すべての悪をつねに排除する。

しかし、これでも必然的に真とはならない。なぜなら、善人が、悪い事態について知っておりかつそれを排除できるとしても、それを排除しないと行ったことは可能だからである。いっそう大きい悪を引き起こすことになるかもしれない場合は、ある悪を取り去ることはできないからである。そこで、さらに (19b) に修正する。

(19b) 善者は、自分が知っており、かつ、より大きい悪を引き起こしたり、それを凌駕する何らかの善なる事態を排除したりすることなしに排除できるすべての悪 E を、排除する。

しかし、この (19b) も必然的に真とはならない。なぜなら、<ある悪 E を適切に排除することができ、またもう一つの悪 E' を同じく適切に排除することもできるけれども、両者を適切に排除することはできない> というような状況におかれている人を想像することは可能だからである。そこで、(19c) に修正される。

(19c) 全能で全知で善なる存在者は、適切に排除できるあらゆる悪を排除する。

しかし、これでも、うまくいかないのである。うまくいかない理由はこれまでとは違う理由からである。一応、(19c) を必然的な真理であると認めはするが、集合 A に (20) と (19c) を追加しても形式的に矛盾する集合を得られないからである。形式的に矛盾をふくむ集合を得るためには、(21) の命題が必要である。

(21) もし神が全知かつ全能であるならば、神はあらゆる悪い事態を適切に排除できる。

集合 A に (19c)、(20)、(21) を加えた集合が形式的に矛盾することを認めたとしても、今度は (21) の命題が必然的に真とはならないのである。つまり、ある善い事態 G はそれが凌駕するような、ある悪い事態 E を包含しているとすると、全能なる存在者でさえも、G を排除することなしに悪い事態 E を排除できないことになるからである。したがって、(21) は必然的に真とはならない。具体的に言えば、痛みがあるのは悪だが、その痛みを耐えることによって全体としての事態は善となるのか

もしれないということである。

結局、プランティンガによると、「これまでの議論が示すことは、少なくとも集合 A に追加されたとき形式的に矛盾を見つけるのは容易なことではない」ということである⁽¹⁶⁾としている。そのため、多くの無神論者たちは、<そこに矛盾がある>と主張するだけで満足しているのだ、と述べている。ただ、私の見解から言えば、マッキーをはじめとする無神論者たちは、プランティンガのように「悪」を捉えているのかという疑問が残る。最後の議論に出てきた善と悪の関係である「ある善い事態 G はそれが凌駕するような、ある悪い事態 E を包含している」というようなものはマッキーや無神論者たちは考慮に入れていないのではないだろうか。少なくとも、マッキーは悪を善の対立するものとして見ているのであって、プランティンガのように、悪を包含するような善を考えてはいないのである。その点について、善と悪の捉え方がマッキーとプランティンガでは異なっている。そういうわけで、悪の捉え方については検討しなければならないだろう。

4. 自由意志による擁護論

さて、「悪の問題」には自由意志論が関わってくる。そもそもキリスト教においては、「神は悪を創造しなかった」という前提がある。したがって、アウグスティヌスは「悪は欠如態たる質料である」とか、トマス・アクィナスは「悪は善の欠如」であると言う。悪が欠如であるとするれば、悪の原因を見出すことはできない。ましてや神に悪の原因を帰すのも間違っていることになる。

ライプニッツは悪を形而上学的悪・道徳上の悪（道徳的悪）・自然悪（物理的悪）の三種類に分類する⁽¹⁷⁾。形而上学的悪というのは「本質的に個体的本性にかかわる法則が持つ有限性あるいは欠如のことである」。道徳上の悪（道徳的悪）や罪は「明晰でない妥当性を欠いた知識に基づいて生起する」。これが自由意志によってもたらされるのであって、神に原因があるのではない。人間の間違った判断によって道徳上の悪（道徳的悪）はもたらされるのである。最後に、自然悪（物理的悪）は「可能な限り最善なる事象群の成立をつかさどる法則によって規定される」⁽¹⁸⁾。したがって、あらゆる悪はより偉大な善を実現するためにあるので、神には悪の責任は背負わされることはない。そういう意味では、ライプニッツの最善観はまさに「現実世界はあら

ゆる可能世界のなかで最善の世界」ということになる。

プランティンガの立場は「自由意志による擁護論は成功している」と論じる。何故、自由意志による擁護論は成功していると言えるのだろうか。たとえば、スピノザのような完全な決定論者は人間の自由などは認めない。したがって、自由意志も認めないことになるし、すべてが必然的な出来事として完結する。そのため、人間の善悪も消失してしまうので、元々悪の問題は生じないことになる。では、プランティンガの場合はどうであろうか。プランティンガは道徳上の悪（道徳的悪）と自然悪（物理的悪）を区別する。そして、道徳上の悪（道徳的悪）が自由な人間の行為から帰結する悪であるとす。そして、神が人間を創造するとはどういうことなのかを言う。

「さて、神は自由な人間を創造できるけれども、人間が善いことだけをするようにしむけたり・定めたりはできない。なぜなら、もし神がそのようなことをすれば、人間たちはけっきょく有意味的に自由ではなくなるからだ。つまり、人間たちは正しいことを自由には行わないことになるのだ。それゆえ、神は道徳上の善をなしうる人間を創造するために、道徳上の悪を為しうる人間を創造しなければならない」⁽¹⁹⁾とする。

これはライブニッツの最善観に批判する意見に対する反論にも思える。悪を行わず、善を行うだけの人間では、人間に自由はないことになる。悪を為しうる人間だからこそ自由があるのであり、それこそ最善の世界にも思えるのである。悪を犯す人間を神が創造したからと言って、神は全能ではないことになるのであろうか。プランティンガは次のように言う。

「自由な人間が時として過ちを犯すという事実は、神が全能であることや善であることに不利になるのではない」⁽²⁰⁾のである。

ここで、マッキーの自由意志による擁護論について、以下のような反論をしているので、検討してみよう。

「もし神が、時には善なるものを好み時には悪なるものを好むといった自由な選択ができる人間を創造したとすれば、なぜ神は、つねに自由に善なるものを選択する人間

を創造できなかったのか。ある場合（もしくはさまざまな場合）に、ある人間が自由に善なるものを選択することが論理的に不可能ではないとすれば、すべての場合に彼が自由に善なるものを選択することは論理的に不可能でありえない。それならば、神は罪を犯さない自動機械を創造することと、自由に行為するが故にときどき過ちを犯す人間を創造することのいずれかを選ぶか、という問題には直面しなかったのだ。自由に行為するけれども常に正しいことをする人間を創造するという、明らかにより優れた可能性が神には開かれていたのだ。この可能性を利用するのに神が失敗したことは、全能でありかつ全く善であるという神の属性とは、疑いもなく不整合である」⁽²¹⁾と述べている。

マッキーの主張はわかるが、神がどんな人間を創造しようとしたのかを、われわれは理解できないということが神に比べて劣っている人間ということが前提である。しかし、マッキーの主張の「この可能性を利用するのに神が失敗した」と言ってしまうのは、神よりわれわれの方が優位な立場にいることになってしまう。したがって、マッキーの主張自体が不整合になってしまう。

プランティンガのマッキーに対する反論は以下のものである。

「自由意志による擁護論によれば、<神が全能であり、かつ、道徳上の悪をふくむ世界を創造することなしには道徳上の善をふくむ世界を創造することができなかった>ということはある。けれども、マッキーがこれに応じて言うには、神の創造の力のこの限界は神が全能であることと不整合である」⁽²²⁾と言う。

これは自由意志による擁護論の核心であり、このことがそうだとすれば、「神には悪をふくんだ世界を創造する十分な理由がある」ということになる。したがって、人間に自由意志があることと神が悪をふくんだ世界を創造することはつながっており、一致していることになる。逆に言えば、神が悪を含まない世界を創造することは人間に自由意志を認めないことになる。

おわりに

これまで、プランティンガの議論を見てくると、「ライプニッツのパラドックス」は無神論者が言うように、そう簡単には「パラドックス」であるとは言えないし、矛盾しているわけではないことも理解できるだろう。また、「悪の問題」と自由意志論はお互いに補完し合っているとも言えるだろう。つまり、人間に自由意志があることとこの世に悪があることはつながっているということである。つまり、人間に自由意志があるから悪があり、神は悪のない世界も創造できたのであろうが、それではわれわれに自由意志を認めさせないことになる。悪のない世界よりも、たとえ悪があってもわれわれに自由意志を持たせることの方が善なる世界だと神は考えたのだと理解できるのである。そもそも、神がどのような世界を最善の世界と考えていたのかはわれわれ人間には分からないという前提がある。ライプニッツの立場からすれば、現実世界がわれわれに与えられている以上、むしろこの世界しかわれわれは知らないのだから、この現実世界が最善の世界でしかありえないということになるのだろう。

注

(1)「ライプニッツのパラドックス(Leibniz' Paradox)」という語は、David Blumenfeld, "Is the best possible world possible?" in *The Philosophical Review*, p.163, April 1975, Vol.84, No.2. に出てくる。詳細な議論は、Alvin Plantinga, "Which worlds could god have created?" in *The journal of philosophy*, p.539, October 1973, Vol.LXX, No.17. にある。

(2)ライプニッツの最善観の内容は、『形而上学叙説』第1項において述べられている。G. W. Leibniz, *Discours de métaphysique*, in *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, hrsg. von C. I. Gerhardt, Band 4, Georg Olms, 1978, §1, p.427. ライプニッツ 『形而上学叙説』所収『ライプニッツ著作集 8巻 前期哲学』工作舎 1990年 第1項 pp.143-144.

(3)そもそも、ヴォルテールの『カンディードまたは最善説』はライプニッツの哲学を風刺したものであり、その背景にはヴォルテール自身、愛人であった侯爵シャトレ婦人(彼女自身ライプニッツの最善説の支持者であった)の影響もあり、ライプニッツ哲学の手ほどきを受けていた。しかし、1755年11月1日のリスボン大地震をきつ

かけにして、最善説に対して疑問を抱き批判を向けるようになった。

- (4)ヴォルテール 『カンディード他五篇』 pp.290-291. 岩波文庫 2005年
- (5)同上 p.366.
- (6)G.W. Leibniz, *op.cit.*, §3, pp.428-429. ライプニッツ 前掲書 第3項 pp.145-147.
- (7)J.L.Mackie, "Evil and Omnipotence", in *The Philosophy of Religion*, p.92, ed.Basil Mitchell, Oxford University Press, 1971.
- (8)Alvin Plantinga, *God, Freedom, and Evil*, p.12, WM. B. Eerdmans Publishing Company, 1974. A・プランティンガ 星川啓慈訳『神と自由と悪と』p.12. 勁草書房 1995年
- (9)J.L.Mackie, *op.cit.* pp.92-93.
- (10)Alvin Plantinga, *op.cit.*, pp.13-14. 前掲書 pp.14-15.
- (11)Alvin Plantinga, *ibid.*, p.14. 同上 p.15.
- (12)J.L.Mackie, *op.cit.* p.93.
- (13)Alvin Plantinga, *op.cit.*, p.17. 前掲書 pp.20-21.
- (14)Alvin Plantinga, *ibid.*, p.17. 同上 p.21.
- (15)Alvin Plantinga, *ibid.*, p.16. 同上 pp.19-20.
- (16)Alvin Plantinga, *ibid.*, p.23. 同上 p.32.
- (17)G. W. Leibniz, *Essais de Théodicée*, in *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, hrsg. von C. I. Gerhardt, Band 6, Georg Olms, 1978, Premiere Partie, §21, p.115. 『弁神論』所収『ライプニッツ著作集 6巻 宗教哲学 弁神論』 工作舎 1990年 「本論 神の正義、人間の自由、悪の起源について」第1部 第21項 pp.138-139.
- (18)A・プランティンガ 星川啓慈訳『神と自由と悪と』pp.197-199. (解説部分) 勁草書房 1995年
- (19)Alvin Plantinga, *op.cit.*, p.30. 同上 p.43.
- (20)Alvin Plantinga, *ibid.*, p.30. 同上 p.43.
- (21)J.L.Mackie, *op.cit.* pp.100-101.
- (22)Alvin Plantinga, *op.cit.*, p.33. 前掲書 p.47.